

e-dream-s 通信

No. 81 発行：2007年10月14日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

～特集～ ECAP 総括 ・ 教育支援

今月号の特集は「ECAP2007総括」と「教育支援事業－カンボジア Cam TESOL ツアー」です。9月に行なわれた ECAP 反省会の報告、そして、2月に実施予定のカンボジアツアー参加予定者からの声が届いています。山田理事の連載「サンフランシスコ便り」も好調です。どうぞお楽しみください。

目 次

1. 教育支援を課題に まずは、カンボジアへ！	中川 房代	p. 2
2. 奇蹟のミルフィーユ	辻 荘一	p. 4
3. 秩序ある美しさ：禅寺のゆしみ	井川 好二	p. 6
《 特集その1 ECAP 総括 》		
4. ECAP2007反省会報告	新谷 幸子	p. 10
5. ECAP2007を終えて	鷺坂 有希子	p. 13
	須賀 幸恵	p. 14
《 特集その2 教育支援事業－カンボジア CamTESOL ツアー 》		
6. Cam TESOL へ！	塚本 美紀	p. 15
7. カンボジアをつなぐ線	須賀 幸恵	p. 16
8. Cam TESOL カンファレンスツアーに向けて ～「第三の人生」のスタート	飯田 佐恵	p. 17
9. カンボジアツアーTESOL カンファレンス参加ツアーに向けて	稲川 宏美	p. 18
10. カンボジア Cam TESOL ツアーに向けて	田中 恭子	p. 19
11. <サンフランシスコ便り>サンフランシスコ州立大学での学生生活スタート —— M.A. TESOL プログラム	山田 昌子	p. 20

教育支援を課題に まずは、カンボジアへ！

中 川 房 代

先週はまだ「暑い、暑い！」と言いながら、日中はクーラーのお世話になっていたと思っていたら、今週は急に秋本番。北海道では雪の予報も？！

2007 年末まであと 3 ヶ月を切りました。

今号は、「ECAP 2007 総括」と「教育支援事業—カンボジア Cam TESOL ツアー」の 2 つを特集しています。この秋は、「ECAP 2007」総括から「ECAP 2008」への準備、来年 2 月のカンボジア・ツアーの準備を中心に活動を展開していきたいと思います。

8 月中旬に実施された「ECAP 2007 Tokyo¹」は大成功に終わりました。来年夏には韓国・ソウルで「ECAP 2008 Korea」を実施する予定です。今回の成功を踏まえ、韓国の先生と協力しながら、より充実したプログラムを作っていきます。「ECAP 2008」に向けては、9 月 22 日に東京で「ECAP 2007」の総括会議を開催しました。東京のメンバーに加え、大阪からも実行委員の藤澤さん、仙崎さん、辻代表理事、井川顧問、河野 ACROSS 会長が参加し、「ECAP 2007」の成果と課題を論議しました。詳しい内容は実行委員会・新谷さんの報告をご覧ください。近日中に、「ECAP 2008」実行委員会の結成を含めた準備を始めていきますので、よろしくお願ひします。

e-dream-s の「教育支援事業」については、これまで情報収集を中心に進めて来ましたが、今回「Cam TESOL カンファレンス・ツアー」を実施することで、新たな段階に踏み出すこととなります。実際に私たちが現地に行き、自分たちの足で歩き、見て、聞いて、感じる、face-to-face でコンタクトパーソンと話す、e-dream-s、ECAP などの活動実績をアピールすることで新たなコンタクトに出会う、そんな企画のツアーです。TESOL のカンファレンスでは、e-dream-s としてもプレゼンを行う予定で、現在申し込みの準備中です。これも担当の塚本理事、コンタクト紹介者の須賀さん、Cam TESOL ツアー参加予定者の文章をご覧くださいね。

さて、教育支援に関して最近のニュースから 1 つ。

藤原紀香というタレントについてです。私自身はファンというわけではありませんが、少し興味を持って見ている人の一人です。彼女は、アフガニスタン、東ティモール、カンボジア、インドなどに取材に行き、その後、様々な教育支援の活動をしています。2004 年にはアフガニスタンに学校を 1 校建設しており、来年はカンボジアに 1 校作る予定だそうです²。主な活動は、

¹ 詳しくは e-dream-s ホームページより「ECAP 2007 報告」「e-dream-s 通信」のコーナーをご覧ください。
<http://www.e-dream-s.org/>

² 写真展で募った寄付金約 2,000 万円でアフガニスタンのバーミヤン県アンダ村に「アンダ女子小学校」を建設した。(カンボジアにも「愛の藤原紀香学校」、スポーツニッポン Sponichi Annex

現地で撮ってきた写真で写真展を開催する、「藤原紀香カンボジア子ども教育基金³」を通じて寄付金を集める、日本の小学校でアフガニスタンの子ども達や学校について講演する、などだそうです。また、自身の結婚式で使用した衣装を使って「十二単チャリティ展示会⁴」を行い、貸し出し料とグッズ販売、寄付金をアフガニスタンの学校建設の資金にしているそうです。

彼女は全くの単独で活動しているのではなく、アフガニスタンの活動は、「社団法人・特定公益増進法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン⁵」と、カンボジアの活動は、「認定NPO 法人 JHP・学校をつくる会⁶」との協力で行っているようです。

彼女の活動に関してはいろいろな見方や評価があると思いますが、私は、彼女の活動は、自分のタレントという立場で写真という自分の好きなツールを使い自分のできることを自然体でやっている、というのがいいなあと思います。聞くところでは、兵庫県西宮市出身の彼女は、阪神大震災での被災経験がこれら教育支援の活動への気持ちにつながっている、のだとか。

自分の立場で、自分の得意分野を生かして、というのは、e-dream-sにも置き換えることができます。「教育」「英語」という強みを生かした支援の形を作り出していきたいと考えています。e-dream-sは来年2月にカンボジアに行きます。少しでも、私たちの方向が見えてくる取り組みにしていきたいと思います。

<追加>

芸能人が海外に学校を建設した例では、歌手の八代亜紀さんが1994年、ペルーに「八代亜紀工業技術学校」を、細川たかしさんが1997年、北京郊外に「錦州桃園小学校」を、森進一さんがカンボジアの首都プノンペン近郊に学校3棟を建てている、そうです⁷。

9月2日より) <http://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2007/09/02/04.html>

³ 「藤原紀香カンボジア子ども教育基金・Tuk Tuk便り」 <http://www.norika-cambodia.com/>

⁴ 「藤原紀香アフガニスタン写真展 アフガンの子ども達の未来のために」 <http://www.norika-afghan.com/>

⁵ 「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」 <http://www.savechildren.or.jp/index.html>

⁶ 「JHP・学校をつくる会」 JAPAN TEAM OF YOUNG HUMAN POWERの略、代表はシナリオライターの小山内美江子さん（「3年B組金八先生」など）で、役員や会員に芸能関係者も多い。

<http://www.jhp.or.jp/index.htm>

⁷ <http://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2007/09/02/04.html>より抜粋

奇蹟のミルフィーユ

代表理事
辻 莊一

教師一人毎日生きて行くだけでたいへんだ。授業の準備をする、授業をする、テストを作る、採点する、集めたノートを検査する、各種書類を書く、掃除当番表を作る、問題行動をした生徒や保護者と話をする、会議に出る、クラブの付き添いをするなどなど、時には土日もなく働かされている。毎日毎年老いて行く身で若い生徒たちと向かい合い、どんどん多忙化して行く職場で時には口出しばかりする馬の合わない上司や定時に帰ることだけを重要事項と考えている同僚の中で、良心的に仕事をするだけでも消耗する。家に帰れば夕食を取り風呂に入りちょっとテレビや新聞をチェックして寝るだけ。家と職場を往復するだけの毎日。やっけて行っているのはこれが教育に携わっているという誇りと生き甲斐があればこそだが、とりあえず毎日生きている世界は狭い。

朝ニュースを見れば世界中で毎日毎日様々なことが起こっている。日本は世界の中で頑張っている。日本人も世界で活躍している。そういえば自分が教えているのは英語で、英語は事実上の世界語であり、世界を相手に渡り合えるように生徒たちを準備してやるのが我々の仕事だったなあ、そういえば自分の英語の勉強も最近ご無沙汰だし、そもそも自分が世界と渡り合えるのかどうかも心もとない、今までそんな機会もなかったなあ、などということがちらっと頭をよぎったりするが、とりあえずこなすべき今日の仕事が優先だ、定期は何処だ？

こうして毎日をすごしている英語教師をどうして責められようか。毎日きちんと仕事をするだけでも立派なものだ。

そして、そうだからこそ ECAP は英語教師にとって奇蹟のような体験だ。韓国の英語教師と email でやり取りをする。韓国・日本・ネイティブスピーカーの英語教師で授業案を練り、準備をして、日本の中学生に韓国文化を教える。これがすべて英語で行われる。日本で普通に英語教育を受け教師になるだけでは、決して体験できなかったことだ。しかも ECAP はどこかの会社や大学や教育委員会が企画したものではなく、私たち（多忙な）英語教師が NPO 活動として発案し育ててきたプロジェクトなのである。

毎日忙殺されている英語教師が、英語教育本来の目的を思い出し、自分自身を生徒のロールモデルとして鍛えてゆく、そんなことが韓国やネイティブスピーカーの英語教師との交流を楽しみながら自然になされていく。しかも日本人英語教師の研修プログラムとしての側面は ECAP の目的の一部に過ぎない。ECAP は韓国英語教師にとってもネイティブスピーカーの英語教師にとっても貴重な研修機会であり、未来の日韓両国の良好な関係を構築することに寄与し、日本の中学生にとっては英語で韓国文化を紹介されることによって英語をグローバルな場面で使うことを体験するという、ミルフィーユのようにいくつもの層をもつプログラムなのである。

どんなことも一度経験してしまえば日常化してゆく。ECAPもまたしかり。2003年から始まって何度か参加すると、当たり前なもの、ややもすればルーティンのように感じられることもあるかもしれない。しかし実はECAPは奇跡のプログラムなのである。ECAPへの参加者は、この奇跡的に素晴らしいミルフィーユを味わえた喜びを再認識すべきなのである。

秩序ある美しさ：禅寺の愉しみ

井川 好二

ザラリとした信楽⁸の皿に、焦げ茶色の豆のようなものが載っている。こういう組み合わせは、この店ではやや珍しい。側には小さな盛り塩で、ザックリとした皿が、こざっぱり纏まって見える。行きつけの小料理屋で出てきた、本日の先付け⁹。



零余子 (むかご) ¹⁰

「この焦げ茶の、小さい芋みたいなん、何？」
「変わってますやろ、零余子 (むかご) ¹¹の塩ゆでです」
「零余子？」
「山芋の枝にできる豆みたいなもんどす」
「へーえ、シンプルやけど、いけるなあ、これ」
「あっさりしてますやろ」
「うん、旨い」

とりあえずのビールの後で、「お酒にしましょか」と女将が運んでくれたのは、「船中八策¹²」。

⁸信楽焼【しがらきやき】中世以来、滋賀県甲賀郡信楽地方で焼かれている陶器。素焼きの焼き締めを特徴とする。中世には壺・甕・播鉢などの雑器が生産され、明るく赤褐色に焼き上がったものが多い。室町後期以降、茶陶が多く焼かれた。

[岩波日本史辞典]

⁹ 本式の料理の前に出す軽い料理。お通し。突き出し。[明鏡国語辞典]

¹⁰ http://www.shishiclub.co.jp/uenoya/yakuzen_mukago.html

¹¹むか - ご【〈零余子〉】腋芽(えきが)が養分を蓄えて球状に肥大したもの。多くは葉の付け根にできる。地上に落下して発芽し、新しい個体となる。肉芽。珠芽。ぬかご。◇ヤマノイモのむかごは食用。[明鏡国語辞典]

坂本龍馬が、江戸へ行く船の上で、新国家の構想を練ったと云う史実「船中八策¹³」から名付けられた龍馬由来の日本酒。キリッとした辛口は、土佐の酒である。心がぐんぐん澄んでくる。

「禅寺はエエな」

「何ですか、急に」

「零余子のせい、この酒のせい、ちょっと秋らしい季節になってきたからか」

「ホンニ、寒なってきましたよって」

「そう言うことやなしに・・・」

最近、禅寺が好みである。その静謐が嬉しい。眼にも感じる静けさが、禅寺には漂っている。一年前、鎌倉の建長寺¹⁴を訪れ、その大きな境内の、がらんとした剛直さがすっかり気に入った。空即是色¹⁵？ちなみに、建長寺は、鎌倉五山の一等である。

今年の春は桜花の頃、友人たちと祇園をブラブラと徘徊しつつ、因らずも建仁寺¹⁶に行き着いた。花見酒に濁った頭が、少しはシャキッとなる。境内に満ちる靈気か？建仁寺は、東山五山の一つ。

「このあいだ、相国寺¹⁷へ行ってな」

「へえ、相国寺はんへ。ひとこと云うてくれはったら、お供しましたのに」

「あの寺もエエな」

「そうどす。相国寺はんて、水上勉先生¹⁸が得度しはったお寺」

¹²船中八策：特別純米 淡麗辛口 食中醇酒 +8.0 坂本龍馬が船中にて考えたという策が、その名の由来。土佐のロマン漂う逸品は、抜群のキレの超辛口。司牡丹酒造株式会社

<http://shugou.mimo.com/products/0039/00097/>

¹³せんちゅう - はっさく【船中八策】1867年（慶応3）坂本龍馬が起草した8カ条の国家構想。幕政返上、議会開設など公議政体論に基づく。藩主山内容堂に建白のため上京する船中で書かれたので、この名がある。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

¹⁴建長寺【けんちょうじ】鎌倉市にある臨済宗建長寺派の大本山。山号は巨福こぶく山。5代執権北条時頼が宋から蘭溪道隆(大覚禅師)を招いて1253(建長5)に創建。以後日本の禅刹の中心的な存在として多くの名僧を輩出。五山制度が確立すると鎌倉五山の第1位となった。鎌倉末期には造営のために→#建長寺船が派遣された。現在も境内および周辺に多くの塔頭を有し、建長7年銘の銅鐘(国宝)をはじめ多数の文化財を伝える。仏殿と唐門は江戸時代に久能山から移されたもの。境内は国史跡、庭園は国史跡・名勝。[岩波日本史辞典]

¹⁵くう - そく - ぜ - しき【空即是色】[般若心経] 固定的実体がなく、空であることによって初めて現象界の万物が成り立つということ。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

¹⁶けん にん - じ【建仁寺】京都市東山区にある臨済宗建仁寺派の大本山。山号は東山。建仁2年(1202)栄西の創建。当初は天台・真言・禅の兼学寺院。室町時代は京都五山の一で五山文学の中心。戦国末期に恵瓊(えけい)が復興。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

¹⁷しょうこく - じ【相国寺】京都市上京区にある臨済宗相国寺派の本山。山号は万年山。京都五山の第2。1382年(永徳2)足利義満の建立。開山は春屋妙葩(しゅんおくみようは)(夢窓疎石は勸請開山)で、以後夢窓派が相承。足利歴代将軍の帰依を受け、五山の中心として威勢を誇った。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

「そや、それに、『雁の寺』のモデルになった塔頭¹⁹もある」

一般の仏教寺院と比べてみると、そのがらんとしたところが、禅寺の特徴の一つであろう。空間が多い。普通の寺院では、境内のところ狭しと、売店だの小神社だのお稲荷さんだのが、並んでいて、寺によっては、その渾然一体に息が詰まりそうな気がする。



相国寺法堂²⁰ (Photo by Koji Igawa)

日本人は、日常が猥雑なので、外へ出て秩序を求める。それが日本人の観光ブームの一因なのだ、司馬遼太郎²¹は云う。

日本の観光ブームは、歴史的な異常現象といいいい。かれらは日常の猥雑のなかからのが

¹⁸水上勉 (1919-) 小説家。大正8年3月8日福井県生まれ。小学校5年のとき、臨済宗寺院での徒弟生活に入る。中学(旧制)卒業を機に修行を放棄したが、この寺院生活の体験は骨肉化され、のちの文学にさまざまな形でかかわっていく。1937年(昭和12)立命館大学国文科夜間課程に入りまもなく中退。20歳のころから文学に手をそめるが、作家としての地歩を固めたのは1959年の『霧と影』によってであるから、寺を離れてから20余年もの歳月が流れている。途中には、私小説『フライパンの歌』(1948)がベストセラーとなるということもあったが、そのできばえには失望、かえって文学から離れた。20年余の時間に経た職業は、配達、小学校助教、行商、編集など30にも及ぶといわれる。復活作となった『霧と影』は、実際にあった繊維業界の取込み詐欺(さぎ)事件に材をとった社会派推理小説。続いて、水俣(みなまた)病を扱った『海の牙(きば)』(1960)、かつての寺院体験に基づく『雁(がん)の寺』(1961)を発表。直木賞を受けた後者は、主人公の悲惨な生育、その母性思慕とエロス、僧侶(そうりよ)の実生活の腐敗などが、推理小説仕立てのなかに織り込まれている。(C)小学館

¹⁹大寺院の山内にある小寺院。脇寺(わきでら)。◇「たっちゅう」は唐音。

[明鏡国語辞典]

²⁰はっ - とう【法堂】禅寺で、住職が法門を講演する堂。他宗の講堂にあたる。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

²¹司馬遼太郎 (1985)「街道をゆく15 北海道の諸道」東京：朝日文庫。

れるために、秩序的な美しさをこいもとめている。日本の国内にわずかに遺されているという場所に殺到して荒らしつくしたあと、筐の実を食いつくした野ネズミの大群が海にむかうように海外まで進出して駆けまわっている。(p. 63)

誠に辛辣な日本人批判である。司馬の云う「日常の猥雑さ」とは、狭いスペースの中で、際限もなく増え続けるモノが氾濫。自分の家にモノが溢れて、整理整頓できない状態であること。あるいは、家を出て近所を歩いてみても、貪欲さに基づく土地私有制度により、周りの道路や広場や家も、その建設はバラバラ。統一性なく作られているため、秩序ある美しさは、街のどこにもない。

日本国内で唯一、例外的に、秩序ある美しさをもつのは、北海道であると、司馬遼太郎は云う。そこへ毎年多くの観光客が殺到し、そのことにより、北海道がまたどんどん猥雑化するのである。

私の最近の禅寺好きは、その「観光ブーム」一環なのかも知れない。猥褻な日常を抱える私は、相国寺の静謐に、臨済の秩序ある美を感じているのであろう。

「相国寺の寺内に、小さな美術館があつてなあ」

「へえ、初耳どす」

「承天閣美術館いうねんけど、これがなかなかエエ」

「そうどすか」

「こじんまりしてるけど、建物がエエし、展示物には、相国寺のものだけやなしに、金閣寺や銀閣寺所有の美術品があつて、充実してる」

「よろしそうどすな」

「けど、ホンマにええのは、そういう美術館があつたり、瓦屋根のきれいな法堂があつたり、背の高い松がまるで海辺の松原のように並んで立っていたりする境内の秩序ある広さ、かな」

そうした禅寺の静謐の存在に、現代日本もまだまだ捨てたものではないと思えるのである。

「今度、一緒に行こう」

「へえ、ほな、明日！」

「ええ？」 (Sunday, October 14, 2007)

ECAP2007反省会報告

ECAP2007 実行委員会 新谷 幸子

ECAP2007を無事に終えることができ、改めて皆様に感謝いたしております。どうもありがとうございました。去る9月22日には、大阪から井川先生、辻先生、河野先生、藤澤先生、仙崎先生が東京に来てくださり、東京メンバーとの「ECAP2007反省会（まとめの会）」を開いて頂きました。この会は、「以後のECAPをいかにより充実したものにするか、今後に生かしていくための会議」ということで、これまでの準備経過や当日の動きを振り返りながら、多くの意見や感想、アドバイスが出されました。ECAPの前にも後にも、こうして大阪から多くの皆さんに来て頂いて、サポートしていただいたことは本当に心強く、嬉しく思いました。今回の貴重な経験を、今後のECAPやe-dream-sの活動に生かしていければと強く感じています。

《ECAP2007反省会 主な内容》()内は発言者。司会進行：辻先生 記録：新谷

1. 東京実行委員より（岡田さん）

- ・ 成功できて嬉しかった。協力してもらえたことに感謝。東京でやるということで主体的に関われてよかった。これからのECAPもそのように参加していきたい。

2. 準備経過についての報告

- ・ **実施要項**…4月下旬から作成して、6月中旬に中学校に発送。作成のやりとりをもう少しスムーズにしたかった。（岡田さん）
- ・ **広報**…中学生への手渡し用に、チラシをもっと作成してもよかった。（岡田さん）
- ・ **プレスリリース**…7、8社に依頼したが目に留めてもらえず、佐藤由美子先生の個人的な伝手で、東京新聞、朝日新聞に依頼し掲載できた。区の広報は難しかった。（岡田さん）
 - 書き方を目立つようにするなど工夫も必要か。（辻先生）
 - 外に発信していく広報活動はe-dream-sの活動であり、社会的に我々のやろうとしていることが分かってもらえるようにしていくことが大事。いろいろなことをやってきて分かることを蓄積していくことや、外に対しての働きかけをシェアしていくべき。チラシ作成など、中身が分からないものを作っていくプロセスで時間をかけていくのは当然のことであり、東京だけで意志決定出来ない点などもあるのだから仕方ない。時間がかかった中で分かったというプロセスが大事。上意下達だったら早かったかもしれないが、東京が主体的にやって時間がかかったことでシェア出来た部分は多かったのでは。（井川先生）
- ・ **助成金**…6つ応募して2つ決定した。応募してくれた稲川さんや仙崎さんから東京メンバーが引き継いで、正式な申請や計画書の作成を行った。
- ・ **韓国との打ち合わせ、連絡**…ユンビンと4月までやりとりを行ってきて、その後の話もつけてくれていた（引き継ぎをしてくれた）のでよかった。（岡田さん）

授業に関しては事前にメールでやりとりしてきたが、実際に話してみているいろいろな意見が出た。まとまりにくいところもあったがよい時間が持てた。(鷺坂さん)

3. E C A P 3日間について

- **出迎え**…飛行機が遅れたが交通面での対応はできた。(宮城さん)
- **会場 (B u m B)**…韓国の先生も満足していた様子。(藤澤先生)
- **Opening Ceremony**…自己紹介がもっと短くてもよかった。(アンケートより)
- **Lecture**…**Professional Development** ということ、教員の大半が英語のコミュニケーション能力をどうにかしたいと思っている。講演後、韓国の先生は全員お礼やコメントを言いに来てくれた。カルチャーの違いがあるのか。(井川先生)
- **Welcome Night**…グループにしたのがよかった。(河野先生)
仕切ってやるぞという責任感に満ちていた感じがよかった。英語をもう少し頑張ってもらいたい。(辻先生)
初めから乗ろうとしている人が相手なのでやりやすいと思う。もう一度反省してみたい。とてもいい task になったと思う。日本人は language learner であり続けて、language user になりきれていない。User になってほしい。K Tとのメール交換もいい task になる。人がやっているのを見ること、自分でもできると思うことが大事。生徒も先生が授業で英語を使っているのを見て分かってくる。英語で何かをすることが大事。(井川先生)
- **授業準備の話し合い**…今までで最も活発だった。(辻先生)
K Tとの連絡が取れていなかったが実際に会って話せて楽しかった。(中松さん)
メンバーの数6人(N S T 1、K T 2、J T 3)でちょうどよかったのでは。実際に生徒が来るという本番があったことで準備に力が入ったと思う。(井川先生)
- **N S T**について…おおむねよかったのでは。
- **生徒の反応について**…「内容がよく分かった」が他の項目に比べて低い。「日本の生徒は普段英語を使っていない」というK Tからの声も。(アンケートより)
生徒の反応は context の違いで変わる。私たち(日本人)は「生徒は分かっているけど、示さないだけ」と分かっているが。来年韓国に行ったときの生徒の反応と比べてみるといいのでは。自分のプロとしての力量や自信は相手によって変わる。韓国と日本で context が違うように、いろんな状況の中で自分の力を試すことによって自分の力も安定していく。(井川先生)
- **Wrap-up Session**…時間が少なかったのが残念。この時間が長かったらもっとよかった(アンケート、N S Tより)
- **Night Tour**…食事も美味しく、景色もよかった。時間が足りなかった。(アンケートより)
- **Field Work**…とにかく暑かった。パーティーは前の晩にしてもよかったのでは。解散してから Field Work でもよいか。E C A P 後2日、Field Work があったから、なくてもよかったかも。(岡田さんほか)
余裕を持った行程を考えるべき。(辻先生)

4. 全体的な感想、気付いたこと、来年に向けて

- ・感動できた。
- ・授業をやってみて、英語をどう教えるか、授業経営を勉強していかなければと思った。
- ・生徒集めに苦労したが、つどいの雰囲気できてよかった。
- ・積み重ね、準備段階が大事。
- ・文化交流や生徒理解など。面白かった。Professional Development の要素が入っていた。マイナスにならないいい経験ができる機会は少ない。

5. 最後に井川先生、辻先生より

- ・大成功だった。外向きに、こういうところがよい、こういうところが画期的と、立派なことをやっているという気持ちで言っていけないといけない。自信を持っていい。それだけの価値があったプロジェクトだった。(辻先生)
- ・来年はどうするか。
 - ①韓国でも授業をする。Discussion だけではつまらない。
 - ②今からKTに頑張ってもらって、早く日本チームを立ち上げないと。
 - ③広報活動について、ちゃんと話をしていく。学校内外で話をしていって、やっていることを理解してもらってお金を出してもらおう。出すところを探していく。値打ちのある活動をしていることを分かってもらう。

来年の夏で6回目のE C A Pになる。今回でいい流れができてきたので、いい計画を今後もしていき、できるだけ沢山で参加していきたい。カンボジアやベトナムなどの発展途上国からも英語教師を招待できればいいかなとも思っている。アジアの中での英語教育において、結びつきを深めていければと思う。(井川先生)

文責・新谷

ECAP 2007 を終えて

B グループリーダー 鷺坂有希子

今年の ECAP では、リーダーという大役を務めなければならないことに始めは戸惑いもありましたが、何とか最終レポートまでたどり着くことができ、今はほっと胸を撫で下ろしています。本番を迎えるまでの準備期間や、実際に韓国の先生方やネイティブの先生方にお会いしてからも、緊張の連続でしたが、皆様のご協力のもと、授業を作り上げられたことに感謝しております。

グループ B のトピックは制服でした。最初にこちらが考え、韓国リーダー Joo さんに伝えたことは、「韓国と日本の制服の違い」に焦点を当て、そこから韓国文化へ関心や理解を引き出せないかということだったと思います。私は韓国の制服についてほとんど知らなかったもので、制服の歴史や現在の制服について調べたりもしました。すると、韓国の制服の歴史には、日本の学ラン（詰襟学生服）と同じものが日本統治時代の名残でかつて着られ、60年代には全廃され制服がなくなったことや、今はタレントがバラエティ番組で学ランをファッションとして着ること、また伝統的な衣装であるチョゴリのことなど、授業のヒントになると思うようなことを見つられました。その中でも、「学ラン」や「チョゴリ」を取り上げながら、日韓の歴史に触れられたらどうかと思いました。しかし、実際には中学生にとってはハードルの高い内容になることだと思い、また私自身もメールでのやり取りの中で、そのあたりを上手く伝えられなかったため、授業のテーマの中心は「現在の日韓の制服についての違いや共通点」となりました。

実際の授業では、予定通りに進められず時間切れとなってしまい、少し残念な思いもしました。しかしグループで話し合った過程では、文化も経験も違う先生方々とあれこれ意見を交わし、時には脱線しながら、同じ時間を分かち合うことができました。上手くいかなかったこともありましたが、改めて考えてみると、日ごろ行っている授業とは多くの点で条件が違い、上手くいなくて当然だったのだと思います。来てくれた生徒がいる以上、「上手くいなくても・・・」と言っただけではいけないのかもしれませんが、しかし何時間もかけてアイデアを出し合い、本番で初めて顔を合わせた生徒の前で授業をするという、普段より数倍高く大きな目標に向け、授業とその準備の過程を経験することができた ECAP は、大変貴重な体験になったと思います。このような機会を与えてくださった皆さんに大変感謝しております。ありがとうございました。

私たちのグループは「文化の違い」に焦点をあてた授業を組み立てることになっていた。事前のメールやり取りではあいさつの仕方の違いを紹介しようということになった。それぞれにビデオクリップやインターネットの動画を持ち寄った。

そしてECAP 初日、韓国の先生、NSTの先生と顔合わせをした。授業の打ち合わせをすると、実は日韓两国の間には挨拶についての大きな違いがないことが分かった。NSTのジェームズによれば、彼の教えていた九州の生徒たちは、まるでアメリカ映画に出てくるようなこなれた挨拶ができたという。教える側が「なるほど!」と思わない材料では、生徒も興味を持たない。急遽その他の違いを探ることになった。

日本の生徒が韓国に行って最初に戸惑うことは何だろう? テーブル・マナーではないのか? でも、日韓でテーブル・マナーに違いはあるのだろうか?

ここでもNSTジェームズが中心になり、彼が日本の生活で戸惑った事を中心に違いを探ってみた。「お箸をご飯に突き刺すことは?」「肘をついて食べることは?」「箸と箸で受け渡しをすることは?」予想に反して日本でタブーとされることが韓国では問題なかったり、日本ではおせっかいだと思われそうなことが、相手をもてなす表現だということが明らかになってきた。「これはおもしろい。デジカメで写真を撮って教材に使おう!」

ECAP 2日目の朝食、ノーさんキムさんがモデルになって教材用の写真を撮った。隣に座っていた井川先生、辻先生がびっくりしながらも興味深そうに眺めているのがとても心地よく感じた。私たちが楽しんでいるのだから、生徒だってきっと楽しめる授業になる!と強く確信した。

果たして、直前ぎりぎりに指導案や教材が完成した。リハーサルもままならなかったので上手く授業が流れるかとても不安だった。ところが、実際は私の心配をよそに全員が細かい部分をフォローしあって、手ごたえのある授業を行うことができた。

ECAP で時間を共にしたのは数日だけのことだったけれど、協力して一つのことをやり遂げたことで「絆」ができたと思う。聞くところでは実行委員の方々はECAP開催中も会全体の世話をするため、ほとんど韓国の先生と話をする機会がなかったそうです。授業作りに集中することができたのも、実行委員会の方々の細かい気配りがあったからだと思う。

実行委員のみなさん、そして塚本さん、岡本さん、本当にありがとうございました。

Cam TESOL へ！

塚本美紀

9月もあと1日を残すだけとなった週末、翌日に締め切りを控えた Cam TESOL への参加希望のメールは2通しか届いていませんでした。カンボジアに行くのは2月で、まだ先のことなので予定も立てづらく、参加表明のメールが届くのもぎりぎりになるだろうと思っていたものの、だんだん不安になっているところに、どんどんメールが届き、最終的には10名（井川好二、Brian Nuspliger、飯田佐恵、中川房代、稲川宏美、仙崎裕右、奥田恵美、文田達夫、田中恭子、塚本美紀）で Cam TESOL への参加を計画することになりました。2月は期末考査、入試、卒業式の準備などいろんな行事が立て込み、なかなか無理ができない時期ですし、そもそも授業がある学期中にお休みをとるのは難しいのが現状だと思うので、こんなにたくさんの方が参加を表明されたことに驚いています。

アクロスに入ることを決意した日、北九州支部の隈元先生が「この会におるとね、訓練とか合宿に参加するために、他の人と仕事を替わってもらわんといけん時があるけ、私はね、自分ができるときは何でもさせてもらって、なんとかアクロスの集まりに参加できるようにしてきたんよ。」とおっしゃいました。穏やかなお顔と小さな体のどこにそんなパワーがあるのかと思いつながら聞いていましたが、仕事で手一杯なのに、この上訓練なんてやっていけるのだろうかと思っていた教員になりたての私にとっては心強いメッセージでしたし、このアドバイスにこれまでずっと救われてきました。そんなことを思い出しながら、こんなアクロスのDNAみたいなものが、私たちの中に受け継がれているのだろうか、なんて考えています。もちろん、どんなに日ごろ一生懸命やっていたとしても、どうしても都合のつかないことはあるわけで、私自身これまでも何度か泣く泣く参加をあきらめたこともありますし、今回そんな思いをなさってらっしゃる方もたくさんいらっしゃると思います。そんな中のお一人である須賀さんは、私たちがカンボジアに行った際に、現地で教育支援活動を行っている人たちと会えるように、いろいろな方にコンタクトをとってくださっています。どんな人たちにお会いできるのか、今から楽しみです。

今後の流れとしては、10月下旬に Cam TESOL への参加申し込みをし、11月16日までに発表の可否についての連絡があることになっています。発表できることになった場合は2月23日が発表原稿提出の締め切りです。私たちの「アジア学校教育支援」の第一歩、しっかり準備していきたいと思います！

カンボジアをつなぐ線

須賀 幸恵

「アメリカは NGO が盛んなところです。ぜひ当地でカンボジアへの教育支援を行っている団体を探してください。」とマサチューセッツ、アマーストに出発する前に言われた。6月末のことだった。「はい、分かりました」と快く了承したものの、「アマーストでどんな生活が待っているか分からない状態なのに、そんな雲をつかむような任務を果たせるのだろうか。」と内心不安だった。

アマーストで私たちのお世話係のブルース教授にその旨相談すると「そういうことならいい人を紹介できるよ。」とスミス大学教育学部英語学教授のKathyの同僚Debra と面会する場を設けてくれた。

Debraはブルーのワンピースを着た小柄な女性だった。カンボジアで現地の先生たちと英語教育を確立するお手伝いをした経験があるという。早速、ホームページを利用して作った簡単なパンフを見せながらe-dream-sの概要を説明した。また我々がカンボジアでどのような教育支援を行いたいと考えているのかを説明した。

Debraは私のたどたどしい英語に熱心に耳を傾けて聞いてくれた。「カンボジアは内戦からようやく立ち直り、教育に力を入れようとしている。教材も不足している。私が教材を寄付したら、一年後その学校を訪ねた際、表紙を補強して丁寧に使っていたことに驚いたぐらいだった。先生たちも英語の教授法にあまり明るくない。知識を吸収したいと切望している。あなたの方がカンボジアの学校を支援しようと考えてくれるのなら、こんなに嬉しいことはない。」と言ってくれた。Debraと話したのは小一時間だったが、思わずうまく糸口を見つけられたこととDebraの熱意に感化されて体が熱くなるのを感じた。

彼女も忙しい人で、その後再会する機会もなく私も帰国してしまった。8月末CamTesolに参加する計画が持ち上がり、事後報告もかねてDebraにメールをした。「カンボジアの教育支援を行っているNGOならMaryknollという団体を知っている。私もSr. Luiseという人と4年間カンボジアでボランティアをした。Maryknollはキリスト教の団体で、第二次大戦後、日本でも活動をしていた。彼女はおそらくCamTESOLに参加するだろうから、連絡をとってみたい。彼女なら他にも教育支援をしているNGOを知っているかもしれない。」とすぐに返事がきた。私もDebraの助言どおりSr. Luiseにメールを書いてみた。現在、彼女の返事を待っているところだ。

アマーストでの6週間の研修ではたくさんのNGO団体を訪れた。移民に英語を教えている団体、家族計画やAIDSを減らすために性教育をしている団体。「私たちは政府に多くを期待していない。自分たちが理想としている社会に近づくため、NGOを通じて社会参加するんだ。」と言ったブルース教授の言葉が強く私の頭に残っている。

e-dream-s、アマースト、カンボジア、私にとってこの3つはひとつずつの点だった。この3つを線で繋ぐことがこれからの私の使命であるし、e-dream-sへの恩返しだと思っています。

「第三の人生」のスタート

(大阪) 飯田佐恵

私は来年古希を迎える。

ある人は人生を二つに分けて退職後から生を終えるまでを「第二の人生」と呼ぶが、私は60歳定年退職後から69歳までを「第二の人生」、70歳以降を「第三の人生」として生きていこうと考えた。それは一昨年、昨年と病気治療でぐずぐずしており、やっと今年は、たまには「痛い！」と言って病院に駆けつけて医者をおどかせることもあったが、お陰様で大したことなく、このままいけばスーッと七十代に入っていけそうな気がするからだ。

カンボジア教育支援については昨年から話がでている。今年の春、私は、副代表理事の中川さんに誘われて、あるカンボジア支援団体の「カンボジアこどもの家」が主催するスタディツアーに参加されたIさんからカンボジアの話をお聞きしたり、当団体の年次総会を傍聴させていただいてカンボジア支援の筋道を探ってきた。そして、いよいよ去る8月のイー・ドリームズ総会でイー・ドリームズの2007年度事業方針の一つとして「アジアの学校、教育支援プロジェクト」が決議され、塚本さんと辰巳さんを中心にその取り組み開始となり、直ちにイー・ドリームズ会員の“Cam TESOL カンファレンス”への参加募集とトントンと進み出した。

私は、この先何年間、e-dream-s活動ができるかわからないが、来年2月の“Cam TESOL カンファレンス”に参加し、「アジアの学校、教育支援プロジェクト」のゴールを目指して私の第三の人生のスタートを切ろうと決心した。

現地の土を踏み、匂いを嗅ぎ、見て、聞いて、カンボジア国の現状を味見して来よう思っている。

(つぶやき：ドクターストップがでーへんやろなあ・・・)

カンボジアツアーTESOL カンファレンス参加ツアーに向けて

稲川 宏美

新しく理事になって、何でも参加していこうと思った矢先、今回のカンボジアでの TESOL カンファレンス参加ツアーの呼びかけがありました。

早速、申し込もうと思ったにもかかわらず、なかなか決心が決まりません。

色々仕事の事を人に頼んだり、職場でのプレッシャーがありそうだったり、必ずしもうまくいっていない今の自分の状況を考えれば考えるほど、二の足を踏んでいた私です。でもやっぱり後悔はしたくない。

参加せずに逃してしまうだろうチャンスは、参加するためにこうむるさまざまな嫌なこととてんびんにかけても自分にとっては、はるかに大きな事だと思ってすべりこみました。

行って何をどうするのかは正直まだ頭の中ではありませんが、ECAP やアクロスの事を伝えられる機会があるならそれに向けてがんばってみたいと思います。

そして、参加するためにするさまざまな努力を今の困難な状況を好転させるエネルギーの源としていきたいと思います。

カンボジア Cam TESOL ツアーに向けて

田中 恭子

e-dream-s の先生方の英語教育にささげる情熱が、カンボジアやアジア諸国の子供たちにも向かっていることは、本当にすごい取り組みだ。

今回 Cam TESOL の参加を知りすぐ感じたことは、日々大学院のスタッフで TESOL のプログラムに関わっている身として、厚かましくも、先生方とカンボジアに集う英語教育関係者の活動を見てきたい、という思いだった。

今のカンボジアの子供たちが求めている教育支援を知るきっかけを探る貴重な機会となる上でも、Conference や現地の学校や教育関係施設への訪問もさせて頂きたい。来年の Conference のテーマ”Building Bridges to the World”のように、e-dream-s の先生方とともに、子供たちが英語を学ぶ事で広がる将来の夢の実現に向けて貢献できる初めの第一歩がそこにあると信じている。

今までカンボジアを意識して考えた事が殆どなく、学校造りに取り組んだ NPO や旅行記の Web-site は残念ながら数年前に作成されたもので、今のカンボジアの様子がつかめなかった。そこでまずは生活文化、教育、社会情勢などを出国までにしっかり下調べしたい。

そして今回カンボジアに行けない多くの e-dream-s の先生方に、カンボジアの子供たちが今受けている教育状況や生活文化、環境、そして将来に向けて求められることを、しっかり見て記録し、ご報告する役割りを務めたい。

<サンフランシスコ便り>

サンフランシスコ州立大学での学生生活スタート

-----M.A. TESOL プログラム

理事 山田昌子

「授業が始まって4週間が過ぎたけど、だんだん assignment が増えてるよねえ。」
「時間、足りないよねえ。」

これは、1週間の授業を終え同じプログラムの日本、及び台湾出身の友人たちと図書館に向かいながらの会話。私は、2年で卒業するために、現在4つのクラス（12単位）をとっているが、そのうち3つのクラスが prerequisites²²。いずれも undergraduate のクラスで、“Structure of English,” “Language in Context,” “Second Language Acquisition”。



もうひとつは、“Second Language Acquisition”と平行して履修しなければならないクラスで、ネイティブは外国語のクラスを履修する²³が、私たちは、writingのクラスをとることになっている。渡米して間もなく8月末に受験した ESL Placement Testの結果、私は“Grad Writing for TESOL”のクラスを履修することになった。

最初の授業で Syllabus を渡される。そこに書かれている Reading Assignment をきちんとやらないと、「listening に自信がないし、授業で何をやっているかわからなかったら困るなあ」と、私は今のところきちんと読んで授業に臨んでいる。「実際、どんだけ読んだんだろう？」とこの原稿を書くにあたって数えてみると、テキスト計6冊で計500ページ足らず、articles は14-15。他の TESOL プログラムを知らないので比較はできないが、個人的には「よくこんだけ読んだなあ」と、我ながら感心する。が、こんなのはまだまだ序の口。ぶ厚いテキストでまだ読んでいないページはまだまだあるし、articles にしてもまだまだ調べることが山のようにある。

来週の月曜に“Grad Writing for TESOL”の paper を提出することになっており、これは私たちにとって初めての paper。ノンネイティブの学生に academic writing に慣れさせることが目的。8月末以来、丁寧に3時間の授業は進められ、“nonnative”をトピックにした draft paper (problem-solving の形式) を提出した後、教授の Office Hour²⁴で一人ずつ20分程度のアドバイスを受け、次の授業で citation²⁵ について質問をしたり、他の学生とペアになって、サジェスションを受けた後、再度書き直し提出することになっている。来週の“Second Language Acquisition”のクラスでも、自分で探してきた articles をもとに、critical review に取りかかり

²² M.A. TESOL プログラムで必要なクラスをとるにあたって必要とされる基礎必須クラス。

²³ 母語と異なる言語を学ぶ経験を得るために平行履修する。私たちは英語で代用可能なため、上記のクラスを履修することになっている。

²⁴ 大学における教授との面会時間。それぞれの教授がこの時間を曜日・時間で設定しており、学生は、いつでも質問に行けるのではなく、事前にアポイントメントをとって授業の質問やアドバイスを受けに行くことになっている。

²⁵ Academic writing では、他の articles から引用し、paper の最後に references として列挙することになっている。

始める予定。冒頭の会話は、これを示唆している。10月に入るとmidterm exams、critical reviewの提出が2つある。また、私が履修している”Language in Context”、つまり社会言語学の授業では、各学生がテーマを決めてインタビュー等でデータを集め、リサーチし、paperにまとめて提出しなければいけない。そのリサーチのwritten proposalやtranscriptionsの提出も控えている。勿論関係するarticlesも読まなければいけない。私は、以前から興味があった日米のTV commercials をテーマにすることに決め、教授のアドバイスを受けた後、録画を終え、これからデータを整理し、ディクテーションしようとしているところ。orientationで仲良くなったアメリカ人の友人に、私の英語を見てねと頼んでいる。このように、しなければいけないことがどんどん増えているので、授業以外の物理的な時間は山のようにあるが、実際は、時間が足りない！というのが実感。それでも、ひとつひとつの取り組みが組織的に進められるように計画され、その都度に教授からのアドバイスが受けられるように設定されている。大変だけど、やりがいがあると感じさせるプログラム構成になっていると思う。

最近、M.A.TESOLプログラムの教授や学生対象の昼食持参の会が開かれ、そこで出会った先輩たちから、「最初は大変だけど、慣れるよ」と言われた。私は、まだまだ要領が悪く、慣れ始めたとは言えないが、それでも、教室で教壇に立つのではなく、米国人にとっても小さいのではないかと思わせるテーブルがくっ付いた席に座り、授業を受け、図書館で予習をしたり、articles をデータベースからダウンロードして読んだり、学生として学ぶのは、私にとって新鮮で楽しいことだ。

私が通っている、サンフランシスコ州立大学（4年制・大学院）は、3万人の学生をかかえている。キャンパスでは英語以外の言葉も飛び交っている。international studentsは、約2,000人（米国全体では60万人）。うち日本人は、287人で第1位、第2位は台湾152人、第3位は韓国121人の順²⁶。が、中国本土・台湾・香港からの学生をすべて足すと第1位となるけど、「統計はそんな出し方にはなっていないだよ」と、大学のOffice of International Programsの担当者J氏は、Peer 39にあるHard Rock Caféで同じテーブルになった時、話してくれた。

私がお世話になっている、M.A. TESOLプログラムでも、この秋からスタートした44名中12名のinternational studentsは、日本、台湾、韓国からの学生がほとんどで、すぐに仲良くなった。もっともアメリカでは、日本のような入学式がないので、orientationが実質的な始まり。M.A. TESOLプログラムでも、新入生対象のorientationがあっただが、全員が出席しているわけではないし、履修クラスも異なるので、同じプログラムでも会ったことがない学生も、実は少なくない。



Office of International ProgramsのJ氏は、「君はラッキーだよ。うちのTESOLプログラムは本当にいいプログラムなんだから。」と言う。よく構成されたプログラムで、教授陣もいい、その上、TESOLプログラムという性質上から、international studentsが大切にされるので、本当にやりがいがあるというのだ。「頑張れよ！」と励ましてもらった。先輩たちの姿からも、大変な中を自力で通ってきたという自信のようなものも感じられる。

²⁶ 2007年秋学期(Fall 007)から学生生活を始まるinternational studentsのためのorientationで発表された統計から。

図書館で勉強を終えた後、私は、友人たちと「来週も頑張ろうね！」と言って笑顔で別れた。

(September 22, 2007)

編集後記：少し遠くまで足を伸ばし、自然や歴史を愉しむにはいい季節。日常の猥雑さから離れるのもまた日常への活力が出てきそうです。サンフランシスコ州立大学のキャンパスの青空がとてもきれいです。（岡田）